

21世紀にキリストを生きる

21世紀にキリストを生きる

2011年：日本大転換の年

<2011年3月11日以来>

「あの日以来、人生が変わった。」

私たちの生涯には個人的に誰にでも一度か二度、そんな出来事がある。今年3月11日に起きた東日本大震災では、個人に留まらず、日本社会全体が「あの日以来、変わった」と痛感し続けているといっても過言ではないだろう。

インドから帰国した翌日、生まれて初めての震度5を近くの商店街で体験した。揺れ始めてから20秒以上経った時、とてもいやな予感に襲われた。「いつまで続くのだろう、この地震は。」大きな揺れが長く続くほど、その地震の規模が大きいという記憶が甦ってきた。このまま地面は永遠に揺れ続けるのでは？と感じ始めた長い5分が終わったとき「きっと関東地方が震源に違いない」と思ったほどだ。1時間ほどして家に戻りTVをつけた私の目に、コンビナート火災の映像と画面半分ほどの「日本全国大津波警報」のチカチカするサインが飛び込んできた。そして、画面は東北沿岸の陸上を疾走する津波の場面に切り替わった。迫力あるシーンの大リーグ中継などのスポーツ番組を見たい、と3年ほど前に父が大画面TVを購入していた。その大画面に、大津波が町や道路、車や家々、そして田畑を呑み込んでいく場面が映画のシーンのように映し出された。この大画面、迫力がありすぎる！（目の前でこの光景を見ていた人は、いったいどんな思いだったのだろう…。）海外での数々の不思議な体験を含めた何十年もの私の人生経験すべてをかき集めても、この状況を把握することは、このとき、私には無理だった。

そして、次の日、福島県で原発が爆発した。「え〜っと、原発って、原子力で電気を起こす発電所ね。福島県にこんなにあったの？」それから数日間、計画停電に備えながら、24時間流れるニュースから原発の一進一退の説明を聞いていた。我ながら、毎日使う電気が最近、どのように作られていたかをまったく知らない無知さに恥じ入るばかりだった。「灯台下暗し。」当たり前である事柄に、これほど思考停止になっていた自分に愕然とする。電気エネルギーこそが、現代文明社会の推進力であり根幹であるというのに。

千年単位で考えれば津波の規模は想定内、福島第一原発では大津波を過小評価した対策しか取られていなかった、原発の使用期限は過ぎていたが、経済的理由から継続使用が承認されていた等々という解説を目にした。私たちの日本社会は、暗黙のうちに「科学成果を利用する人間への過信」、「将来の命の危険性より、目先の利益確保優先」を前提に動いていたことが、放射能に曝されたように白日の下に晒されたと思えた。

明治維新以来、150年近くにわたって私たち日本社会が追い求めてきたものの前提が、今、私たちの首を絞めようとしているかのようだった。

<日本のキリスト者の存在意義>

2011年。日本社会に突きつけられた大転換を前にして、聖書の神を信じ聖書が語る世界観を信じるはずの日本のキリスト者に、日本社会での存在意義が大きく問われているように思える。世界のキリスト教会の歴史では、神が人間に託された知恵を用いた科学の結論を否定する愚を犯したこと

もあった。聖書に記されているように、耕し、新しいものを作り出す知恵や能力を神が人間に与えてくださったことを私たちは否定する者ではない。では、これまでの経済と社会の行き詰まりの果てに、目に見え

ない放射能汚染の拡散という大事故の結果に怯える日本社会に対して、キリスト者の私たち個人と集まりには、一体、どのような言葉と行動が求められているのだろう。

戦後 66 年の韓国と日本

<韓国の友人 Park Soohwan(パク・スファン)、震災後、福島応援来日>

私が韓国人のスファンに始めて会ったのは、16年前の1995年8月、私が活動をしていたバングラデシュだった。大学を卒業したばかりのスファンは、若い女性には伝統的イスラム教国のバングラデシュ滞在は難しい、と忠告されたにもかかわらず、滞在を決断する勇敢な女性だった。

韓国人である彼女との出会いは、奇しくも日本の第二次世界大戦敗戦から50年目にあたった。開国以来、欧米諸国に追いつくために一貫した富国強兵策を取ってきた日本は20世紀始め、当時の清やロシアとの資源争奪戦を経て朝鮮半島植民地化を遂げた。その後、戦争終結までの40年近く国の主権を奪われ、戦後の60年以上は半島分断の悲劇を経験した朝鮮半島史の100年は、日本を含め周辺国の野望に振り回された痛ましいものである。日本国民の一人としてこの歴史を思うとき、私は暗澹とし続けてきた。あまりにも大きな負の課題なので、積極的に関わるには荷が重すぎた。80年代半ばまで軍事政権だった韓国は、日本人には近くて遠い国であり、まだ途上の国だった。それが、90年代半ば大学卒業したての韓国人スファンが最貧国の一つであるバングラデシュに奉仕にやってきたのだ。

「世界は変わった。」彼女の出現は、今までの私の世界の見方を大きく転換させた。韓国はもはや、途上国ではない。韓国人は世界に大きな貢献をする民族の一つだ、と。それ以来、途上国、そして世界で「神の国」を目指すために、スファンはキリストにあ

るかけがえのない同志になった。主から彼女に与えられた組織の分析力や明晰さに、私はしばしば感嘆した。同時に、それは権力の動向を見究め続ける必要に迫られた朝鮮半島史の負の遺産であることも理解できるようになった。そして個人的には、日本占領下で、彼女の親戚が日本軍から受けた痛みや悲しみを新たな思いで知ったのだ。

2009年からスファンはカナダのキリスト教大学、リージェント・カレッジの専門研究員になっていた。3月の終わり、その彼女から電話がかかってきた。

「日本に応援に行くから。」

私たち「声なき者の友」の輪では、原発事故後、放射能汚染で避けられていた福島県で活動することを祈って決めていた。そのことを承知で4月半ば、変わらずに勇猛果敢！なスファンは私たちの福島訪問に合流した。

まだ余震の止まない関東に来た彼女は、空港での異様な光景を語った。「入国審査場には外国人は一人もいなかった」と。4月、東日本は世界中から放射能汚染で恐れられていた。日本に来る直前に韓国の恩師に電話した彼女は、恩師に絶句されたという。関東大震災のとき、流言のため多くの朝鮮人が日本人に殺されたことを、私は不覚にも忘れていた。が、その日本にスファンは来る決心をしてくれた。「ミドリが助けてくれるだろうと思った。」と言う彼女に、その瞬間、私は日本人として過去の歴史に対峙していると感じずにはいられなかった。

過去の負の歴史を引きずり次の世代にバトンを渡すのか、それとも互いの国の和解

の使者として、一步を踏み出すのか。

歴史を讀み回復するために、神は私たちをキリストの大使としてこの時代におき、機会を与えてくださったのだ。私にとって20世紀の重い歴史であり、出口のあまり見えないアジアや朝鮮半島との関係に光が差し込んだ。多くのものが破壊され、チェルノブイリ事故に並ぶ世界最悪の原発事故に直面し暗闇にいた大震災後の日本と「共にいる」ことを決意した韓国の友によって、和解の手が差し伸べられたようだった。ひとりひとりが生を与えられた民族それぞれに神の壮大なご計画と導きがある。日本という民族の一員であり平和を作る神の子として、戦後66年目の今年は私にとって大

震災による破壊に終わるのでなく、韓国との和解推進、平和構築の新たな年として、主が昇華してくださったことを感じている。



彼女は、福島の希望ある未来を日本のキリスト者と共に主に聞くために再来日して、7月終わりに開催された「福島未来会議」に、参加することになった。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。・・・
あなたがたが私を選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

歴史を変える和解は、「あなたを選んだ」と言われるキリストに従うことを選んだひとりのひとから始まる。私は、未来のために、今日、どのような行動を選ぼうとしているだろう。

「共に喜ぶ」未来をつくる

＜21世紀：世界の友たちと共に成長するために差し出された手＞

7月下旬、スファンは「福島未来会議」に参加した。韓国人キリスト者、そしてすべてを包含した「神の国」の視点から福島の窮状に寄り添い、見つめようとしてくれた。その後、共に福島の教会を訪問し、今、主がキリストの体を通してなさっていることを世界へ発信する役割をスファンは担った。(福島県で主が見せ、彼女に与えられた思いを発信する彼女の英語のブログは、<http://fearnotfukushima.blogspot.com/>です。日本の方々の日本語ビデオ付きですので、是非、ご覧ください。)

今回、彼女の存在、そして共に労することを通して、私は21世紀に世界の友たちと「共に成長する」という、「声なき者の友」

の輪、創設時に主から与えられたビジョンをわずか一年の間に、主が前進させてくださったことを感じずにはいられなかった。



そして、そこに主にある大転換があったことを今、思い巡らしている。

世界で苦闘している民族と共に歩んで成長しようと考えていた日本人の私が大災

害・大事故の日本におかれた。そして、勇気を持って訪問し手を差し出してくれた韓国の友人によって、「共に成長する」醍醐味を逆の立場で味わったのである。

スファンは言う。「日本の原発事故は、化石燃料による温暖化に待たなしの世界のこれからのエネルギーの方向性に、大きな一石だ。これからの日本の歩みから世界はさまざまなことを学ぶことになると思うよ」と。日本が資源争奪戦争に二度とのめり込む事のないことを祈るとき、韓国人の彼女のこの発言は重い。

神さまによって造られた私たちは、孤島として日本人だけで自己完結することはありません。多くの民族の良さから学び、世界の多くの人々に学んだことを分かち合い、与えられているものを分け合いながら、みんなでこの世界を建て上げていくようにと、命を与えられているのだ。

私の計画をはるかに越えた今回の経験は、21世紀の転換期に導かれた私の歩みに寄り添い、支援をしてくださっている皆さまの祈りを主が聞き上げてくださったものと思えてならない。

大きな転換期にある日本で、転機に直面しておられるお一人お一人の歩みを主が支え、足元の光となって導いてくださいますように心からお祈りしつつ。

「お祈りください」

- **2年目になる世界の国々とのパートナーシップの深化のため：1年間の試みを経て2年目に入る「声なき者の友」**

の輪のグローバル活動では、インドやガーナ、そして、アフリカの新しい国と、21世紀に不可欠な側面に焦点をあてて相互に学びあうパートナーシップに導かれるように祈っています。主の声を聞いて、相互成長の交わりを深められますように。

- **原発事故で苦闘している福島県の教会と県民の皆さまのために。「福島未来会議」後の主の導きのため：「選ばれて」福島県に置かれているキリストの体である教会、そして福島県民の皆さまの未来を主が照らし、新たな希望をもたらして下さいますように。秋も福島訪問が続きます。主のお働きかけをお祈りください。**
- **「神の国」の大使として「神の国」が近づくように仕えることを決意した日本と世界の「からし種エージェント」のため：7月に母教会で「声なき者の友」の輪主催で、地域での「神の国」実現を目指した「隣人を愛する習慣作りセミナー」が開かれました。あらためて、イエス様が目指された「神の国」の視点が多くの人々に、人生の明確な方向性を与える力があることを感じました。小さな種である「私」が用いられることを確信した方々のために。**

皆さまと共に主のお働きを期待できることを心から感謝しながら。

柳沢 美登里

2011年8月16日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

ご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。